

高橋和巳全集

第十五卷

監修

吉川幸次郎
埴谷雄高

河出書房新社

高橋和巳全集 第十五卷

中国文学論 1 ©1978

Printed in Japan

一九七八年 十月二十五日 初版発行
一九八二年 二月 五日 再版発行

著 者 高橋 和 巳

発 行 者 清 水 勝

発 行 所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三三―二
電話 営業〇三―四〇四―二二〇一
編集〇三―四〇四―八六一一
振替 東京〇―一〇八〇二
印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

I

表現者の態度 I——司馬遷の發憤著書の説について
表現者の態度 II——職業としての文学の誕生

5

20

II

六朝美文論

45

陸機の伝記とその文学

83

潘岳論

188

顔延之の文学

279

江淹の文学

301

劉勰『文心雕龍』文学論の基礎概念の検討

317

中国の物語詩——おもに「秋胡行」について

346

顔延之と謝靈運

371

III

中国詩史梗概

425

六朝詩選

438

IV

文学研究の諸問題Ⅰ

文学研究の諸問題Ⅱ

文学研究の諸問題Ⅲ

解題・補記

54^I

530 520 509

第十五卷 中国文学論 1

表現者の態度Ⅰ——司馬遷の發憤著書の説について

新しい文学の登場は、単に表現技術の変革や新素材の発見によるばかりでなく、常に新しい文学的態度の確立に裏付けられてなされる。それゆえに文学論ないしは文学批評なるものは、表現の背後にあるその態度のあり方への提言や勧告を当然含むべきであり、とすれば漢の司馬遷の『史記』の序文「太史公自序」および友人任安に与えた返信「任少卿に報する書」は、中国の文学批評史上、——そしておそらくは世界の文芸思潮の中においても、見逃しえない重要な意味をもつものといえる。

中国における文学批評は、魏の曹丕（一八七—二三〇）の『典論』論文の出現以降、魏晉南北朝時代がその確立期であると考えられ、それ以前は謂わば批評史的前史時代として記述されるのが普通である。勿論、断片的とはいえ、先秦諸子の言説や漢儒の著述の中には、以後の中国の文人意識のあり方を大きく規定する発言が多く含まれ、同時にそれらが後世の文学批評や理論に重要な基礎概念を提供することとなった故に、批評史的視角からする先秦諸子や漢儒の発言の抽出と整理の作業も相当精密にすすめられている。たとえば、孔子（BC五五二—四七九）の詩經観、孟子（BC三七二—二八九）の知人論世の説、莊子（？—BC二八九）の輪扁説話にみられる一種の不可知論と天才主義の萌芽、そして漢代の經典注釈家たちによる比興説つまりは最初の解釈学的修辭学の完成など。それらの大要は郭紹虞の『中國文學批評史』をはじめ、羅根澤、傅庚生らの著述、わが国では鈴木虎雄博士の『支那詩論史』に、各々の比重において例外なく触れられている。ま

た批評史的前史時代に定立された特定の観点や定義づけ、例えば『詩經』大序に明確にあらわれる「詩は志を言う」の説などに関する個別的專論も数多くあげることができる。だがそれら、漢代においては、司馬相如（BC一七九—一二七）や揚雄（BC五三—AD一八）、桓譚（BC二四—AD五六）や班固（三一—九二）らの断片的發言をすら忘れない文学批評史も、なぜか全く司馬遷には触れていない。かつまた、最近盛んにおこなわれている司馬遷に関する伝記的研究や、『史記』のもつ文学性に注目する論文なども、李長之の『司馬遷の人格と風格』など少数の例外をのぞいては、司馬遷が人間の言語表現というこの活動に対して付与した強烈な意義づけ、言語表現と具体的な行為との関係についての独自の見解を、問題の俎上にのぼそうとはしていない。従ってまた司馬遷の態度というものが如何に強大な影響を後世に及ぼしたかということも見極められない。

なるほど、『史記』は歴史であって、現在われわれがいう文学ではない。「太史公自序」や「任少卿に報ずる書」も、従ってまず第一義的には歴史家の態度表明であって文学者のそれではない。しかしながら、近代的なジャンルの区分に従って純粹な文学批評や文学論いがいの發言を問題の埒外におくなら、魏晉以前の断片的發言はすべて文学批評史の紙面から抹殺しなければならないとする明らかな誤謬におちいる。

司馬遷の時代にわれわれが普通に意識するジャンル別や専門科目別がすでに存在していたのなら、一つの領域についての發言は他の領域と一応無縁のものとして取扱ってよいだろう。だが当時における「文」概念は、より総括的なものであり、しかも大切なことは、単にそれがジャンル分化の未発達ゆえに、偶然境界の重なり合う未開の見方が存したのではなくて、その時代においては一つの完成した見方として総括的視点が存したのである故に、現在のジャンル区別に対応する發言内容の比重如何によつて、單純にこれは哲学、これは歴史、これは文学という風に区分することはできない、或いはしてはならないのである。確かに『文選』の時代すなわち西紀六世紀に確定する三十六体が、漢代に明確でないという点で、文学内のスタイル別については比較的には未分化であったといえる。だが儒家の經典、詩、書、易、春秋、禮が各自その性質を

異にするという知識は早くからあったのであり、しかも、それを〈経〉ないし規範的な〈文〉なる一概念で総括的に把握していた、その「当時における完成された見方」の存在がより肝要なのである。過去の時代を歴史的に、発展的にみる見方はそれ自体正しいものだが、同時に一つの時代の心性の様相を、その時々完成していた一つの円環として全体的に受けとることが、とりわけ精神科学の分野では大切である。人間の創造するものもろの文化は、時の流れとともに移ろいゆくものではあっても、移ろいゆえに先を見越して何もしないというわけでは毛頭なく、かつまた人は最初から移ろいゆくものとしてもろもの価値を創りだすわけでもないからである。だがこの問題は別の機会に詳説するとして、ここでは、『史記』は、後世の文学者なかならず古文家が秦漢の文と称するとき、その典型的模範として尊敬されたことから知れる通り、すくなくとも中国においては、長らく散文文学としても意識され読まれたものであることを指摘するだけで十分であろう。たとえば宋の唐庚の『文録』にいう。「六經已後、便すなわち司馬遷すな有り。三百五篇〔詩經〕のその後、便すなわち杜子美（杜甫）有り。（中略）故に文を作るには當に司馬遷を學ぶべく、詩を作るには當に杜子美を學ぶべし。二書亦た須すべらく常に讀むべし、所謂何んぞ一日として此の君無かる可けんや也」

さて問題の「太史公自序」は、便宜的に分ければほぼ六つの部分からなっている。

冒頭は司馬氏の家系を述べた部分。ここで司馬氏が世々相伝の歴史家・天文家の家柄であることが述べられる。

次は任職三十年の太史令であった父の司馬談の簡単な学歴、および彼の思想的立場が説明され、その立場すなわち道家的観点からする、当時有力であった六つの学派の理論要旨の紹介と長所欠点の指摘がある。同時にそれは父の遺志を継いだ司馬遷じしんの思想的立場の表明としての意味をもつ。六派とは、武田泰淳の『史記の世界』のみごとな要約にそいつつえば、宇宙形而上学派たる陰陽家、〈禮〉を根幹とした個人倫理は、社会秩序や政治理論にも一元的・同心円的に適応しようとする儒家、節儉力行主義の墨家、言語形

而上学派ないしは論理学派である名家、法律至上主義の法家、道徳的にも政治的にも徹底した自然主義を押し通す道家である。その六派批判の前に『易』の言葉「天下は一致にして百慮、歸を同じくして塗を殊にす」が引用されていることからあきらかなように、司馬遷の基本的態度は記録者の凝固的空間においてのみなされる純粹客觀主義にある。司馬遷はいう。「太史公は既に天官を掌す。民を治めず」と。民を治める立場にはかかる客觀主義は存しえないが、記録者には、傾向を異にする種々の動向の帰結を透視することができると暗に主張するわけである。のちに説く司馬遷の言語表現の意義づけにこの前提は、正反両面に大きく作用する。

第三の部分では司馬遷自身の経歴が述べられる。自序の記述にそいつつ、前人諸研究家の業績を利用して簡単に説明すれば、それはほぼ次のようである。西曆紀元前一四五年、漢景帝の中元五年ごろに生れたと推定される司馬遷は、十歳のころ都の長安に出て孔子十二世の孫である儒学者孔安國に古文『尚書』を学び、ついで二十歳のころから大規模な旅行をおこなった。足跡は、江淮の北方から、會稽、長沙、齊魯、徐州、大梁、登封におよんでいる。古戦場や偉人の生地をたずねる漫遊の旅である。そののち郎中となり、漢武帝の巡行にしたがって、扶風、平涼、空洞に行き、また二十五歳のころには使いを奉じて巴蜀、滇、昆明にもゆき、その見聞の範圍はほとんど全国的だったといえる。紀元前一〇年、漢武帝が封禪の儀式をおこなったとき、父の司馬談は史官でありながら病氣のために参加できず發憤して司馬遷に歴史家の任務を説ききかす。……周に暴君幽王・厲王のあらわれてのち、王道は欠け、礼楽は衰えた。孔子があらわれてそれを復さんとし、旧きを修め廃れたるを起し、『詩』『書』を整備し、『春秋』を作った。学者たちは以後いまにいたるまでそれを規範としている。だが、『春秋』の終幕たる獲麟の故事いらい四百有余年を経ているが、歴史記録の伝統は絶えてひさしい。いま漢が天下を統一し、自分は歴史官となったが、論著は完成せず、このままでは天下の歴史の廃れるのが懼れられる。「余死せば汝必らず太史爲れ。太史と爲らば吾れの論著せんとする所を忘るる無かれ。且つ夫れ、孝は親に事うるに始まり、君に事うるに中だち、身を立てるに終る。名

を後世に揚げ、以て父母を後世に願わすはこれ孝の大なる者なり。」読みくだしたこの部分の後半はまったく『孝經』の文章の借用であるが、これものちに述べる司馬遷の「發憤著書」の説の一つの裏付けをなす觀念であり、彼の経歴との照応において一つの痛切な意味をもつ。父の司馬談は司馬遷二十六歳のころに死亡喪があけて、彼は父の職務をつぎ、宮廷に保存された記録をむさぼり読む。数年後、彼三十歳のころより実際に『史記』の著述をはじめのわけである。

「太史公自序」は、つぎに春秋学者董仲舒（BC一七九—一〇四）の言葉をかりて六經の区分、とくに『春秋』の性格規定をなし、それとの比較において、『史記』がより即事実であることを説明する。この部分に歴史家としての明確な態度表明が、孔子の言葉をかりてなされている。「我れは之を空言に載せんとしても、之を行事に見わすの深切著明なるに如かず。」理論的裁断よりは事実ありのままの記録を選ぶというこの言葉は、元來經書を補うものとして意識されるものながら、資料的信憑性には乏しい緯書（中国における偽聖書のようなもの）にのせるもので、孔子の発言としての重みよりも、むしろ司馬遷がここに引用したことによって、以後、儒家の基本的態度の一つとなったものである。

ところがその後、「李陵の禍」にあったことを簡単に述べるや、突如として、前の部分で規定した六經の区分や、歴史家としての態度表明をも覆うものとして、ここで中心的にとりあげたく思う、人間における表現と行為に関する彼の激しい認識が語られる。「……而うして太史公は李陵の禍に遭い、縲紲に幽わる。乃わち喟然として歎じて曰く、是れ余の罪なる夫、是れ余の罪なり。身は毀たれて用いられず矣。退きて深く惟いて曰く、夫れ詩書の隱約なるは、その志の思いを遂げんと欲すれば也。昔西伯は姜里に拘えられて『周易』を演べ、孔子は陳蔡に屈められて『春秋』を作る。屈原は放逐せられて『離騷』を著わし、左丘は失明して厥の『國語』有り。孫子は脚を廢られて兵法を論じ、不韋は蜀に遷されて世に『呂覽』を傳う。韓非は秦に囚えられて『說難』『孤憤』あり。『詩』三百篇、大抵は聖賢發憤して爲作る所なり。此れ人みな意に鬱結する所有りて、其の道を通ずるを得ず。故に往事を述べ來者を思うなり」

司馬遷がみずからの主張を打ちだすために援用している故事を一々詳細に説明している紙面はないが、現代からみて、屈原の場合をのぞき歴史事実としてはかならずしも従い難い牽強を敢えてして、主張していることはただ一つ、形而上学も歴史も哲学も、兵法も政治論も文学も、一切の秀れた言語表現は、作者の現実的行為の場での挫折からくる、果されざる意志の代償的発露であり、その積極的意味は、為し得ざりしみずからの志とその価値を過去に計り未来に問うことにあるというただ一事である。したがって、この発言は、極限的におしつめてゆけば、もし現実において具体的な行為の道が開かれてあれば、著述をなす主体的理由はかならずしも存しないという理論にまでゆきつく。司馬遷のこの主張は、彼が援用している故事が、例えば『春秋』が孔子の作かいなかに疑いがあり、『詩經』のすべてが少くとも聖賢の發憤による作ではないことなど、事実において錯誤がある以上、全面的に従うことはできないし、特にこうして態度が一つの文化哲学にまで推し進められるなら、むしろ非難されねばならぬ危険思想となる。だがしかし、後世の『史記』研究家による文献学的な誤謬指摘によつては、司馬遷のこの説のふくむ真実さはかならずしも崩れない。なぜなら、これは著述に対する客観的な価値判断の基準を提出しようとしているのではなく、あくまでも態度の問題であり、それゆえにふまえられた故事の部分的誤謬にもかかわらず主体的真実性は生き残りうるからである。したがって、故事の二々がどのように正確でないか、或いは誤っているかは、例えば近人高歩瀛の『史記太史公自序箋證』（『女子師範大学学術季刊』第一期第一卷）などの考察にゆずるとして、この理論がどうした主体的理由から、かつまたどうした価値意識、どうした形而上学との相関から生れたかを考察することがより必要である。

司馬遷をしてこうした過激な考えを懐くにいたらしめた境遇上の理由については比較的よく知られている。いま引用した一文は、『任少卿に報ずる書』にもそのままの形ででてくるのだが、その重複をどう解釈するかは後日の論として、結果的に、發憤著書の説の司馬遷の觀念系列に占める位置は「太史公自序」に、その主体の根拠は「任少卿に報ずる書」において明瞭に読みとれるという形になっている。すでに中島敦の小説